

〈翻 訳〉

エコノミクス  
第2巻第2号  
1997年11月

ザバヌー・ギッフオード著

## 『トマス・クラークソンと反奴隷制運動』(その1)

徳島 達朗

翻訳

Zerbanoo Gifford, *Thomas Clarkson and the Campaign Against Slavery*. 1996, Anti-Slavery International. London.

ザバヌー・ギッフオード著『トマス・クラークソンと反奴隷制運動』(1996年, 国際反奴隷制協会発行 ロンドン) (その1)

本資料は、反奴隷制運動の指導者トマス・クラークソン没後150年を記念して、国際反奴隷制協会の発行したものである。著者ザバヌー・ギッフオードはインドに生まれ、三歳からイングランドに居住し、現在少数民族救済委員会 Commission into Ethnic Minority Involvement の委員長を務めている。彼女は1989年に婦人問題に関わる業績により、ネルー記念賞を受賞している。王立芸術協会の会員でもある。

本資料訳出の経過を記しておく。平成8年末、本資料を長崎県立大学大学院の教材として取り上げた際、大学院生(山盛謙吾, 小川秀樹, 梅村隆継, 堤 亮太, 藤田佳彦)が分担して訳出した。さらに徳島が全体を読み訳文の再検討を行い、文体等の統一を図ったものである。なお日本版翻訳刊行については、徳島が同協会の許可を受けている。

## 国際反奴隷制協会の序文

1996年には反奴隷制キャンペーンに関連する重要な記念すべき節目がいくつか刻印されている。まずトマス・クラークソン Thomas Clarkson 没後150年であるが、彼はウィリアム・ウイルバーフォース William Wilberforce とともにイギリス国民と政府に奴隷貿易および奴隷制をやめるように説得をおこなったのである。クラークソンは「最も高潔なイギリス人」といわれているが、彼は自分の人生の長い期間廃止運動に係わり合ったが、今日でいうキャンペーンとか議会陳情などという方法の先駆けであった。1996年9月26日、ちょうど彼の死んだ記憶すべき日に、ウエストミンスター寺院で碑銘の除幕式が予定されていて彼の生涯は祝福されるのである。

そしてアフリカにおけるフランスの植民地において奴隷所有の廃止が実施されてから100年である。またあらゆる形の奴隷制の廃止という最初の国際条約締結—1926年の国連定期総会—から70年目である。そして第2回目の奴隷制、奴隷貿易および奴隷制に類する制度や慣行廃止の国際条約締結—1956年国連臨時総会—から40年目である。

奴隷制と奴隷貿易は人権に対する最大級の侵害であるので国際社会の注目を集めたのである。人々は多くの場合奴隷制に関する知識は多少あるけれども、それは歴史上の問題であると考えるのがほとんどで、今日の問題でもあるとは考えない。悲しむべきことであるが、こうしたことは奴隷制の現代的形態が依然存在することがほとんど理解されていないし、不十分にしか研究されていないということ、さらに廃止キャンペーンのための資料が十分には存在しないということの意味している。しかしながら、児童奴隷、強制労働、借金奴隷、奴隷状態の結婚、セックス観光旅行や買春に対して現在関心が高いのは、大規模にこの抑制のシステムが作動し続けているとは自覚していないとはいえ、奴隷制の現代的形態について、人々は心配していると言えるのであろう。

18世紀における奴隷貿易反対キャンペーンの広がりや、人権に関する自覚の高まりと密接に関連していた。それは公的なまた私的な分野において、この運動にみずから専心できうるエネルギー、勇気、着想を持つ人々によって

推し進められた。個人の信念と個人の参加というこの伝統は今日まで継続して、まさに意見の対立あるいは危うさもあるのである。こうした個人、クラークソンのような場合、効果的に目立つようにしたり、奴隷のように扱われている幾百万の人々がみずから抑圧の社会的体制や搾取の連鎖からの解放のために耐えている日々の闘争を支持しようとするならば、彼らの運動の背後に世論の重みを必要としたのである。

1990年代の人権と平等を希求するキャンペーンは世界の発展に関する論議において強力な役割を演じている。つまりわれわれは困苦の統計数字やテレビをつうじての残忍な抑圧的なイメージを日々浴びせられているからである。われわれはみなこれらの光景や事実に関心されるが、われわれはどのようにすればその信念を価値ある行動に向けることができるのかわからないことが多い。国際反奴隷制協会は人々が奴隷制を現代の人権問題として理解し、しかも人々が価値ある貢献をすることができるということを教育し、励まし、行動の動機を与えたいと願っている。人権のより広い理念、もちろん社会的な変化を成就するために、時として不可能に思えるおかしなことに取り組む個々人の能力を発展させることをつうじて、今日まさに奴隷制に対する大衆の自覚を確立する必要があるのである。

国際反奴隷制協会には奴隷制についての質問、それらのほとんどが奴隷制の歴史についてだが、児童や教師からひっきりなしに寄せられている。しかし多くの国では奴隷制に関する出版物は乏しく、学校のカリキュラムでは完全にはずされていることがわかっている。奴隷制が現代世界のモラルと文化の輪郭を形成し、奴隷制に類似した慣習が今日においても広がりいまだに幾百万の人々の生活に影響を与えているということが知らされれば、この出版物はもっと注意を喚起し行動を促すことに貢献するだろう。国際反奴隷制協会では奴隷制の歴史についての情報をもっと提供し、服従を強いるこの制度に反対する積極的な行為の実例を人々に提供することを企画している。

18世紀および19世紀の奴隷制度の恐怖を忘れることによって、今日広範に同様な虐待を行う制度が国際的な抗議と抵抗を受けずに広がっていることを許してしまう危険がある。奴隷制はわれわれの歴史の決定的な相貌であるばかりでなく、現代の執拗な実相なのである。もしも平等と自由の信念、こ

これはイギリス、ヨーロッパ、西洋の人々により非常に高く賞賛されているが、これが今日の奴隷制の廃止キャンペーンに向けられるならば、21世紀は幾百万の人々の生活と歴史の方向を再び変化させる一時代となるであろう。

奴隷制はいつでも存在したということは疑う余地のないことのように思われる。経済的な面での人々の従属ということは古代ギリシア、ローマ社会では普通のことであった。事実、多くの世界的に賞賛される偉業は奴隷制の基礎のうえに構築されたものである。堂々としたエジプトのピラミッド、アメリカンドリームのおおきな好機の推奨、そして世界的に拡張する資本主義システムは自由と多くの生命の犠牲により創出されたものである。しかしわれわれの奴隷制に関する出来合いの連想は、幾百万のアフリカ人の故郷からアメリカや西インド諸島への搬出と労働と束縛の生活となった18世紀、19世紀の大西洋奴隷貿易にとどまっている。この時代の奴隷制はたしかにイギリスの歴史において誇りうるものではないが、しかしその中には、今日においても価値と関連を持ち続ける情報と課題をもたらず存在なのである。

奴隷制の歴史を研究するにあたり大きな問題のひとつは、この貿易のほとんどすべての記述が白人によって書かれていて、それゆえ彼らの見方に強く影響されているということである。奴隷たちは書くことを禁じられていたし、時として彼ら自身が奴隷の経験をもとに書いた場合でも、それは信用されず無視されたのである。今日でさえも、白人（それもしばしば奴隷所有者）によって書かれた奴隷の記録が「歴史」というタイトルで図書館にあるのがみられるが、他方黒人奴隷の作品はたとえ利用可能であるとしても「文学」というタイトルで見出されるのである。一般的な概念として、白人による奴隷制の説明は依然として事実であり、黒人によるものはフィクションとみなされるのである。もっとたくさんの原典や他の史料が網羅されない中で、奴隷たちはほとんどの白人、奴隷制廃止論者に対してさえも奴隷時代について非常に異なった説明を与えたのであろうと思わせる証言が増加してきている。特に、近年奴隷制に関する議論が集中しているのは、黒人奴隷自らがその抑圧を終了させる上で果たした役割である。反乱を起こしたアフリカ人は生きている積み荷あるいは抑圧された魂としての必要なイメージと一致しないので、奴隷の抵抗はイギリスでの奴隷制賛成、反対を問わず両方の宣伝者によりその

役割は過小評価されていた。われわれが廃止運動の、またトマス・クラークソンの特筆すべき成就を考察する時、われわれは故郷、家族、アイデンティティーを求めた彼らを拒否した、この制度の転覆にあたっての奴隷たちの能動的な参加を見過ごすべきではない。

さらに歴史に関する議論の主要なポイントの一つは、イギリスの奴隷制廃止は大きな犠牲を払うものだったのかあるいは好都合な解放であったのかという点に集中していることである。いかなる国も大きな利益を生ずる貿易を自発的に止めることはないのであり、イギリスの奴隷制の価値は減少していたのであるといわれている。しかしながら、他の者たちはイギリスは奴隷制廃止のためには財政費用が必要であろうということを承知しているが、それは人間に対する野蛮な搾取を終了させるために支払うべき価値のある価格であると信じられている。事実それはまったく経済的な決断というのでもなくまったくモラルにもとづく決断というのでもなく、両者の要素に影響された動機であったのであろう。さらに、奴隷のコストの上昇と生産物価格の下落という事実があり、そのため膨大なアフリカ人奴隷の抑圧と制度的な酷使に反対して表明されているイギリスの世論の強力な潮流を無視することはできないのである。

トマス・クラークソンは精神面および経済的根拠の両面から奴隷制反対に関与した。奴隷船所有主の側の「支払うべき犠牲」と考えられる船員たちの死亡者のようなイギリスにとっての隠れたコストを指摘したのは彼が初めてであった。奴隷船所有主はただ自分の人間の積み荷を売ることが可能なように長く生きさせることに関心があっただけであるが。そうした論争でのクラークソンの議論は決定的な力を持っていたと、広く信じられていたし、信じられている。

同時代人にとって、トマス・クラークソンは奴隷制の恐怖を終わらせるキャンペーンを背後から推進してくれる力であった。奴隷制に反対する戦いを当時の主要な政治問題に転換させるためにはクラークソンの見通しと粘り強さを必要としたのである。この人の努力を通じて廃止キャンペーンは、1785年から1807年のイギリス帝国内の奴隷貿易の終了および1834年のイギリスの

完全な奴隷解放まで、すべての人々の心の中に存在したのである。彼の調査によって、恐れおののく大衆の面前で奴隷貿易の全過程に内在する固有の暴力を暴露できたのである。彼の偉大な個人的な努力はイギリスの大多数の人々の同情心が少数の者の利己心に勝るということを確実にするうえで助けとなったのである。

クラークソンの主要な長所のひとつは一意専心の決断力であった。彼はキャンペーンは成功するだろうと断固とした態度であり、「彼がいったん実行すると決意すると、それはできないのだと彼を納得させるのは不可能だ」と、一人の友人はいった。もう一人の友人、ロマン主義詩人のサミュエル・テイラー・コールリッジは次のようにいった。「私は彼を精神蒸気機関あるいは一つ思考の巨人と呼んでいる」と。これらの賛辞が示唆するように、クラークソンは奴隷制は終わらせるべきだという「理念」と持続する変化を創出する個々人の能力の両方を深く信じていたのである。彼は人々の良心を呼び覚まし、彼らの態度を変化させねばならないと悟った。そしてこれをおこなうためにさまざまな方法を採用し考案した。それがひとつの単一な大きな運動の背後に他のさまざまなグループの統一をもたらしたのである。彼の先導のもとで、廃止を求める要求は緊急の問題となり、あらゆる階層の人々を統合したのである。廃止論者は、知られるように、最初の近代的な「圧力団体」であり、変化を求めるために大衆の意見を動員することによって政府に影響を与えようとしたのである。

クラークソンの先駆的な非凡な才能は、まったく新しい一連のキャンペーンの道具立てがこの戦いに勝利する最善の道であることを自覚していたことである。奴隷制と戦うための彼の戦略は、すべての人がそれなりのやり方で熱中するようになることであった。当時婦人は投票することや請願に署名することはできなかったけれども、彼女らはこの運動への連帯を示すために反奴隷制のカメオを身につけることができた。人々は皿からかぎたばこ入れまで、鎖につながれた奴隷をイメージした「私は人でもなく友人でもないのか？」というウエッジウッド Wedgwood を買い、この問題への注意を喚起することは可能であった。ロマン主義詩人たちは情熱的にこのキャンペーンの精神的な力を支持して作品を書いた。そして他の人々と一緒になって、奴

隷制下で生産された砂糖を飲物に入れるのを拒絶した。

その他多くの方法と同様に、クラークソンは彼のキャンペーンにおいて彼の時代の先頭に立っており、「便宜の旗」（不誠実な船主は自分の船舶を他の国に登録して自国の法を逃れた）に反対した。クラークソンは、当時イギリスの法律の中に宗教上の非寛容と偏見が安泰であった時代に、英国国教会の執事であったけれども、彼はあらゆる信仰を持つ人々、特にクエーカー教徒とともに廃止の仕事を進めた。彼はまた女性の平等についての最初の支持者の一人であり、男性と同様な教育が受けられるべきであり、専門職—牧師さえも—につくことも許されるべきであると提案した。

廃止論者の運動に対する大衆の支持を得るために、クラークソンは国王や皇帝への裏工作におよんだが、これらの権力者たちは奴隷制の終了を迎える決意を高めさせたのは、彼の出版物と彼の個人的な説得であったと述べている。事実、クラークソンの国際主義は他国との関係の持ち方から明白なことである。彼はフランスの廃止運動への支持を高めるために、革命の真最中に進んでフランスにでかけている。彼はイギリスの慈善家でもあり1787年に、現在のアフリカ、シエラ・レオーネでの解放奴隷のセツルメント建設のための援助をおこなっている。彼は奴隷制と内乱の後の西インド最初の独立国の社会、経済構造の再建において困難な挑戦的な課題に直面したハイチの王ヘンリー一世に対し、忠言を与えている。クラークソンはハイチの利益のために、また奴隷制反対のためにあらゆる機会に、国際的に裏工作をおこなった。奴隷制反対のキャンペーンが、合衆国で盛り上がりはじめた時に、運動のリーダーたちが忠言と支援を求めたのはクラークソンであったという事実により、彼の威信と影響力が推し量れよう。

クラークソンは人間はすべて各人が自由であるべきであるという、精神的議論の優位さを常に堅持していた。しかしながら、彼はまた利益のあがる奴隷貿易をやめるにあたっての、実践的な財政的な問題に関する議論でも勝利できるということを確認していた。この問題に対する彼の知識の深さは比類ないものと認められていたが、それは何カ月にもわたり奴隷貿易と関係のあった人々2万人とイギリス中に出向いて面談調査をおこなった結果なのである。アフリカ人はいかに野蛮であるかという奴隷業者の宣伝を迎え撃つため

に、クラークソンは彼らの文化と技能、アフリカとの公正な交易の可能性を宣伝するために、すばらしいアフリカ製の物資を入れた箱を携えていた。

クラークソンが大衆に奴隷制の恐怖を伝えるためにつくりだしたいくつかのイメージ、例えばイワシのように詰め込まれた奴隷船の印刷物、彼自身の言葉としての「本棚に詰め込まれた本」のようなものは、今日でもまだお馴染みである。クラークソンは絶え間なくまわり、奴隷貿易について調べ、それに反対するキャンペーン活動を励ました。彼は彼自身の名声とか富よりも運動の推進を熱望する廃止論者の使節であった。その結果として、彼の成功を達成する戦術は生き続けているが、クラークソン自身の名前は忘れられがちである。今日、他の多くのキャンペーン活動は彼の手法を採用している。実際、圧力グループが請願の署名を人々に奨励し、その地方のグループと手を結び、ボイコットを開始する時に感情に訴えるイメージを用いるが、彼らは廃止論者の足跡を追っているわけである。

しかし、すべてのクラークソンの非常に貴重な仕事は偶然の結果として生まれたものである。彼がケンブリッジ大学で奴隷制の正否についての懸賞論文に応募し入賞するまで、彼は英国国教会での仕事に彼の生涯を捧げることを心から希望していたのであるから。

## トマス・クラークソン

トマス・クラークソンは1760年3月28日に、ジョン・クラークソン、アン・クラークソン夫妻の第三子として、ケンブリッジシャーのウイスビッチに生まれた。彼の父は地方教区の副牧師でウイスビッチのグラマースクールの校長であった。この父はトマスの6歳の誕生日の三日後、彼が訪問した病んでいた教区民の熱病に感染し、突然死んだ。若きトマスは15歳まで、亡くなった父の学校で学び、それからロンドンのセント・ポール・スクールへ進学した。当時のセント・ポール・スクールは大聖堂に隣接していて、勉強よりも厳しい躰で有名であった。それでもトマス・クラークソンの学力は抜群で、かつて父の学んだケンブリッジ大学、セント・ジョーン・カレッジへの奨学金をふたつ獲得した。トマスは父の後を継ぎ聖職者になるであろうと思われ



た。ある教員などは彼はきっと出世してイングランドの教会の主教になるだろうと、予言までした。トマスはケンブリッジで優等賞を得たので、1783年に、この進路の第一段階として、ウインチェスターでの執事を任命された。

しかしながら、クラークソンの学問に対する関心は依然として強く、ケンブリッジの修士課程の大学院生として、大学のラテン語小論文コンテストに参加する資格を有していた。1784年に、彼はあるコンテストで第一位を受賞し、さらに第二のコンテストに参加したが、彼は二つの小論文で受賞する初めての学生になる決意を固めた。小論文の課題を出したのは、副法官のペッカー博士であるが、彼は奴隷貿易の反対者であった。彼が選んだ、‘*Anne liceat invitos in servitutem dare?*’ (「人をその意志に反して奴隷化するのは正しいか」) という課題は、ケンブリッジ大学が奴隷所有者や投資者からかなりの寄付を受けているという事実からみて勇敢なものであった。

クラークソン自身が認めていることだが、この論文の研究にはわずか二ヶ月しかなかったし、彼は始める以前には課題について全然知識はなかったのである。彼はまたアンソニー・ベネゼットの『ギニアの歴史・・・奴隷貿易の開始と展開に関する調査』を見つけたことが幸運であったと白状している。アメリカ人クエーカーの書いたこの本は、クラークソンに大いに感銘を与えており、彼は次のように記している。「この貴重な本には自分が求めているものがほとんどあることがわかった」と。イギリス人大衆の関心をひくために奴隷貿易問題を提起した、おそらく最初の人にはグランヴィル・シャープなのだが、その彼にかつて影響を与えたのが、他でもない正しくベネゼットの著書であった。シャープは法制度に進んで挑戦し、イギリスにおいては奴隷制は不法であると法廷が宣告するように迫る企画を立て、黒人奴隷に対する下品な不正義を抱えた訴訟を矢継ぎ早に取り上げた。奴隷制度の廃止に影響を与えた彼の努力もまた認められる必要がある。

## グランヴィル・シャープの裁判闘争

グランヴィル・シャープ (1735-1813) は奴隷制廃止運動の父であると公認されている。クラークソンと同様にシャープも宗教家の家系で、父は 大執事

であり祖父は大主教であった。事実、彼は多少変わり者と見做されていた。というのは兄弟達のようにより高級と見做される専門職につくのではなく、どちらかといえば下級な公務員を選んでいるからである。

1765年に、シャープは外科医をしている兄弟のウィリアムのところへでかけたが、治療を待つ行列にいる若い黒人の様子に衝撃を受けた。彼はひどく乱暴に打ち据えられたため立っていることも、見ることもおぼつかなく、みるからに極度に悪い状態であった。シャープは胸をつかれ行動をおこし、この若者を患者の列の先頭へ、さらに診察室の中へ連れて行き、兄弟が治療をする間、若者に付き添っていた。彼らにはその若者の名前がジョナサン・ストロングであり、所有主で弁護士のデイヴィッド・ライルによってバルバドスから奴隷として連れてこられたということがわかった。ライルはストロングをピストルで殴り付けたが、しまいにはピストルが粉々に砕けてしまった。さらにストロングがもはや役に立たない財産になったので路上に投げ捨てたのである。こうした非道な攻撃を受けた結果、ストロングはセント・バーソロミュー病院に入院し退院できるような健康を回復するのに4ヶ月を要した。シャープは彼が仕事を探すのを援助した。

ストロングにとって万事順調に収まるようにみえたが、二年後、1767年に前の所有主ライルが偶然に路上で彼を見つけたのである。彼はストロングがまだ生きているのを知って驚き、彼を誘拐するために急いで二人の奴隷ハンターを雇った。ライルはストロングをいまだに所有していると信じていたので、プランテーション所有者で彼を西インドに送る計画を立てているジェームズ・カーに30ポンドで売却した。しかし出帆前に、ストロングは自分に何が起こったか詳細に書き付けて、何とかシャープに送り届けた。シャープは裁判所に直行しカーを誘拐の廉で訴えた。この訴訟はロンドン市長により審理され、市長は「何も盗まなかったがゆえに有罪にはあたらない。」彼は「どこへ行くのも自由である。」と、宣告した。しかし、ストロングを西インドへ輸送するために待機していた船長は、奴隷に好意的な評決を信ずることができず、ストロングの腕をつかみ連れ去ろうとした。シャープは船長に止めるように、さもないと暴行の廉で告発すると通告した。シャープが後に日記に書いているように、「船長はすぐに手をひっこめた。さらに全員は市長の面前

から退散した。そしてジョナサン・ストロングも衆目を集めて、完全に自由にその場を立ち去った。その後、誰も彼に強いて乱暴を働く者はいなかった。」

しかし、こうした出来事があつたにもかかわらず、この苦難に終止符が打たれることはなかった。ライルはシャープに決闘を挑み（シャープがこれを拒否）、カーはシャープが「自分の奴隷に対する根源的な所有権を奪った」として、ストロングにかかった費用30ポンドを要求する訴訟を起こした。シャープの事務弁護士は、彼にこの裁判では負けるから当該金額を払うよう助言したが、シャープは脅しに乗ぜられることを拒否し、その後、自ら関連する法律を勉強し、この訴訟でカーを打ち負かす対応策を編み出した。

いまや彼は議論の余地なく自由人であるけれども、5年後に再び病気になり倒れた。彼はちょうど25歳で死んだが、それはライルにひどく殴られた時の傷がもとであった。ストロングは無慈悲な取扱によって命を切り短められた、無数の奴隷の一人にすぎないが、彼はたまたまグランヴィル・シャープに出会い、そのうえイギリス帝国の奴隷制廃止の先駆けを画した裁判闘争のために今日においても記憶されているのである。シャープにとっては、すべての奴隷を守ることが急がれる課題であり、さらに、イギリスでは奴隷制は違法であると、裁判所が宣言することを促進させる努力を続ける決意であった。カーが裁判で引き下がって以来、シャープは実験的な裁判になるような不公正な実例を探し求めた（法の何たるかが不明確な時、それを決する裁判事件を）。彼は長くそれを待つことはなかった。1771年に、トマス・ルイスが彼の前の所有者によって誘拐され、ジャマイカ行きの船のマストに縛り付けられたのである。かかる人間に対する非道な情報がシャープのもとに届いた。シャープは迅速にその船の出港を止める令状を手に入れた。幸運にも、逆風が出帆を妨げ、裁判所の吏員は令状の執行を行った。この吏員が後に書いているのであるが、ルイスはと見ると、彼が取扱に抗議して泣き叫ぶのをやめさせるために猿轡をはめられていたが、解放されることを知ると涙が顔を流れ落ちたと。

ルイスの事件は、彼は高等法院判事で、イギリスの最高位の裁判官である、マンズフィールド卿により審理された。マンズフィールド自身、奴隷所有者の一人であり、ロンドンにいる奴隷の一人、エリザベス・ディド・リンゼイ

は彼の甥の娘である。そのような訳で、彼がイギリスにおいて奴隷は合法的か否かの根本的な判断を避けたのは驚くに当たらない。マンズフィールドは次のような見解を表明している。すなわち、「議論したり、決着をつけない方がよほど良い・・・万一、イングランドへ運ばれている奴隷がたまたま事故にあい、奴隷所有者はその財産を失ったとしても、その結果がどうなるのか私には判断できない」と。そして再び、奴隷達は個人としての権利あるいは自由を有しない、単なる財産とみなされたのである。

しかし、この事件の陪審員はルイスは自由人であり、誘拐は許されないと結論を出した。この評決は傍聴席の多くの者に喜びをもって受け入れられた。彼らは「物なんかじゃない!物なんかじゃない!」と、叫んだ。だが、陪審員がルイスを自由人であると宣告する決定をなしたにもかかわらず、マンズフィールドはこの裁判がイギリスのすべての奴隷に適用されるのをまぬがれるよう処理した。

シャープは廃止のための裁判キャンペーンを断固として継続した。そして間もなく再び法廷でマンズフィールドに会った。今度は、ジェームス・サマーセットの事件で、彼は合衆国、ヴァージニアから奴隷として運ばれたのであるが、逃亡したものである。彼の前の所有者で、チャールズ・スチュワードが再び彼を捕らえ、西インドへ送ろうとしたのである。この時シャープはこれを阻止する依頼の手紙を手にしたのである。

その裁判は1771年に開始された。シャープに依頼された弁護士団は、奴隷が奴隷として扱われるのは、それが合法的なところに限られると論じた。アメリカにおいては、多くの州の法律で奴隷制を許容していたが、イギリスの法律はまったくそうではなかった。さらに、イギリスでは奴隷制を認めていないので、以前、サマーセットがイギリスに到着した時、彼はもはや奴隷とは考えられなかったのである。主張点を説明するために、弁護士の一人は次のような質問を行った。「ヴァージニアの法律は、この国において日本の法律よりも、影響力および力ないし権威を有するものなのか。」と。これはマンズフィールドにとって、否定することは困難な質問であった。そこで彼はこの裁判を数カ月も引き延ばし、さらにイギリスにいるすべての奴隷にこの裁定が適用されるのを避けるために、サマーセットの前の所有者が、その損失と

サマーセットの解放を受け入れるようにという説得を試みた。スチュワードはこれを拒絶し、この裁判は再開された。ついに、1772年6月、マンズフィールドは裁定を下した。「外国人を彼自身の国に存在する法律の權威に依って、ここで投獄することは不可能である・・・彼が業務を放棄したとか、その他の理由で、海外へ売り飛ばすために力づくで奴隷を連れてくるのを許可された主人などここにはまったく存在しなかった、」と。

サマーセットおよび彼の擁護者シャープはこの裁判に勝利した。そして、彼の成功に終わった「試訴」がイギリスにおける奴隷制に終止符を打ったと、広く報道された。これが広く知れわたった結果、一万人に及ぶと推定されるイギリスでの奴隷は、解放された。しかしながら、多くの者は売却されたし、西インドのプランテーションに向けて搬送された。事実、この結論は軽率すぎたものであり、マンズフィールドは、奴隷制やそれに類することは、イギリスでは違法であるという裁定を回避して、またもや巧くやっていった。その後、長年にわたって、イギリスの新聞は奴隷売買の広告を掲載し続けたし、多くの奴隷がその所有者のせいで無情なそして暴力的な取扱を受けていたのである。

1793年に、マンズフィールド卿は死亡した。彼はイギリスにおけるすべての奴隷を解放するという規定には、早々に拒否しているが、彼の遺言では、彼の甥を父として生まれた奴隷のエリザベス・ディド・リンゼイを自由にするという明瞭な指示を含むものであった。マンズフィールドは、イギリス社会の尊敬すべきメンバーとして、ウエストミンスター寺院に埋葬された。

シャープは1787年の奴隷船ゾング号に関する裁判事件でも名を知られている。この船の船主は131名の病気に罹った奴隷が、同船の乗組員により船上から投棄された時の財政的損失の補償を請求しようとした。幾週間といわず幾カ月もかかった航海の後、ゾング号の船長は、保険業者は「積み荷」の損傷というよりも、損失として補償してくれるだろうと信じて、その奴隷達を殺してしまった。しかしながら、保険業者は病気が原因で死亡したとする証拠がないことを根拠に支払いを拒否した。もしも、奴隷が反乱に依って殺されたのであれば、保険業者は何の不満もなく支払いに応じたことであろう。奴隷とは、法廷で明瞭に言い渡されたことなのだが、単なる物であり、人間では

ないのである。それ以外のように考えることは「狂気」であった。

この事件についてシャープが関心を払ったので、奴隷船の過度な乗船を規制する手段を導入する、ひとつの議会法が1788年に通過した。このことは奴隷制を廃止することを望んでいる者にとってはちっぽけな達成であった。グランヴィル・シャープが疲れを知らずに、それに向かって努力した法制度上の勝利は勝ち得なかったかも知れないが、しかし、道徳ならびに廃止運動の政治的土台を据える点で成功した。トマス・クラークソンが自分自身の運動を築き上げたのはこの堅固な土台の上にてであった。

## 奴隷制の実態についての研究

クラークソンは彼の書こうとしている論文は、学術的な訓練つまり「文章の榮譽を目指す純然たるコンテスト」であると、思っていたが、奴隷制についてさらに読んでいくうちに、自分がその主題にますます引き込まれていくことを知った。二ヶ月の間、彼は自分の論文の調査と執筆に費やしたが、奴隷貿易の悪夢のような恐怖を扱っているのがつくと眠りにつくことが難しくなっていた。彼はコンテストの作品を最終的に提出した時点で安堵し、ケンブリッジを離れロンドンへ向かった。学究的活動を通じて、クラークソンはイギリスが奴隷貿易に深く関与し、しかもその抜きさしならぬ関係は恐るべきもので、道徳的乱れを来たしているということを見出すことになるのである。

イギリスはアフリカの海岸へ船団を送り、アフリカ人の意志に反して奴隷を手に入れた。それからアメリカや西インドの植民地で働かせるために大西洋を横断して、彼らを運んだ。最後にこれらの植民地で強制裁培されている砂糖、たばこ、綿花などの換金作物を持ち帰ってイギリスに戻るものであった。このサイクルは「三角貿易」として知られていた。そして航海の各辺において、イギリスの利益は莫大であり、「新世界」への中間航路で多くのアフリカ人が生き残ることができないということは致命的で、かつ明らかなことであった。

奴隷船における死亡率は高く、少なくとも20人に1人は死亡した。ほとんどが「下痢」(赤痢)による脱水症状が原因であった。赤痢の蔓延を防ぐ決

定打は良好な衛生状態であることは今日では常識であるが、奴隷船のひどい拘束状態のもとでは、それは不可能なことであった。「甲板は彼らの部屋であるわけだが下痢のために排出された血と粘液があたりに撒き散らされた状態で、ちょうど屠殺場のようなものである・・・それは人間の想像を絶するもので、その恐ろしくまた胸のむかむかする場面は筆舌に尽くし難い。」と、ある船医は述べている。

悪夢の航海で生き残った者も衰弱しきっていて、西インド上陸後できえも、医者達の最善の努力があっても次から次ぎに莫大な人数が死ぬのである。万一、生き延びて労働できる奴隷は、いまや貴重なそして利益を産む商品なのである。いくつかの島では医者が医療にあたる人数が、今日のイギリスの開業医にも及ばない場合もあったのである。

それにしても、プランテーション到着後、三年以内にアフリカ人奴隷の四分の一乃至三分の一が死亡したという事実は、奴隷達が耐えることを強要されている状態が本当に恐ろしいものであるという事を明白に物語っている。最大の殺し屋は「浮腫症」(現在、脚気として知られる)であり、これは不十分な栄養が原因だが、その外、熱病、「下痢」、イチゴ腫であった。最後の二つは非衛生的な状態が原因であったが、浮腫症は奴隷達が6月の砂糖収穫作業および8月、9月の新作物植え付け時に空腹を強要される時に最悪の状態になった。欲深なプランテーション所有者が、奴隷達の食物を栽培するために留保していた土地の小区画をさえも、砂糖生産用の畑に転換した時、こうした状況はさらに悪化した。

この苦難を伴うプランテーションでの労働は、夜明けに始まり14時間に及び、一週間に六日間行われた。夜と休日である日曜日に、奴隷達は自らの一週間分の食物を栽培できるようになっていた。この日々の苦痛が底深い難儀と離散を演じなかったかのように、奴隷達は家族関係、夫婦の愛情などお構いなしに、頻繁に他の主人に売られた。子供たちは母親から引き離されて売られた。

プランテーション所有者は、「男の力強さと労働力のために」、男の奴隷には高い値段を覚悟しなくてはならなかったもので、ほとんどの船は女の二倍もの男を運んだのである。たとえそうでも、畑での重労働はたいてい女がおこ

なった。それは女達がプランテーションでの熟練乃至半熟練の仕事向きの訓練を受けていないからである。事実、女にとって畑仕事にかわるものは、唯一家事(家庭)奴隷になることであった。

妊娠した奴隷は出産の六週間くらい前まで働き続け、出産後は三週間で仕事に戻るのが普通であった。女奴隷が産んだ子供の四分の一が、生後一週間で死亡するという事は、驚くにあたらない。さらにその四分の一は最初の一年の内に死亡したと推定されるのである。現代の基準に照らして子供の死亡率が非常に高い時代とはいえ、これらは衝撃的な統計である。子供たちは歩けるようになるとすぐに母親の傍らで仕事につかされた。奴隷所有者のための、ある手引きは次のように助言している。「子供にはひとつずつ小さなかごを持たせるべきである。落ちている屑や葉っぱを拾わせ、雑草を抜かせることで多少とも役立たせるようにすべきである」と。

そうした高い死亡率と低い出生率を抱えている西インド諸島では、新規奴隷に対する需要は一層拡大し続けた。バルバドス島では黒人も白人も、女の「疾患」を持っているのだという冗談が他の島では取り沙汰されていたけれども、新しく始める生活において奴隷貿易の選択を宣伝したのは、まさにこの島であった。バルバドス島における奴隷の状態は依然として劣悪であったけれども、結婚の機会はこの地域では最高であった。奴隷達は多産であり、同島のアフリカ奴隷の新規輸入は衰えた。このことは奴隷貿易が廃止された1807年以降、特に重要になった。しかし植民地ですでに働いていた奴隷は解放されたわけではなかった。

西インドのどこでも奴隷人口は白人人口を凌駕していた。秩序を維持し、権力を行使するために、主人たちは恐怖と奴隷たちの全権利を否定することによって支配した。アフリカ人奴隷たちは無慈悲なさまざまな刑罰に直面した。畑での「怠け」の鞭打ちから、逃亡、盗み、反抗にとどまらず、単に所有者に逆らって土地の小区画をくれるように訴えただけで、手足の切断、拷問そして死であった。たまたま偶発的に奴隷を殺した場合、所有者は、「罰あるいは罰金を科せられることはない。」と、法律は定めている。奴隷達は奴隷所有者や他の白人に対立して証拠を提出することは不可能なので、彼らには労働者としての経済的価値を除けば殺人に対してなにひとつ保護もない状態に



放置されたのである。ある島の法律はこの観念を完全に明確にしている。すなわち、「主人の権利は最高の価値があり、奴隷の権利は無価値」なのである。奴隷が処刑された場合、たとえ些細な反抗でさえ高い代償となるのだという注意を喚起するために、その死体は仲間の眼前で腐敗するまま放置されるのである。この服従のシステムならびにアフリカ人奴隷の退廃の総和こそが、人間性の権利そのものの否定なのであった。

祖国からもぎとられ、強制的に奴隷化されたアフリカ人の生活が、奴隷としての惨めな結果をもたらしたことはけっして忘れるべきではないけれども、このような状況のもとでさえもみられた抵抗と創意に満ちた意思表示の顕著な行動もまた記憶すべき重要なことである。武装した奴隷の反乱は明らかに抵抗としては、最も極端な暴力的な歴史の挿話である。この反乱は奴隷制時代をとおして継続し、またほとんどすべての植民地で起こった。最も組織的で、激烈なしかも成功した反乱は、1740年に終結を見たジャマイカのマルーン戦争である。マルーン（脱走奴隷）の自由共同体はアシャンティの尼僧ナニー Nanny の指揮の下、イギリスと戦い、600エーカーの彼らの土地を確保したが、最も重要なことは自由を勝ち取った事である。しかしながら、主人の命令に対する抵抗もまたさらに巧妙なやり方で、遂行された。奴隷達が怠惰であるとする不満は奴隷労働者が故意に「だらだらとやる」からであると考えられている。彼らは労働を敢えて拒否するわけではなく、できるだけ少し、そしてできるだけゆっくりと働き、あるいは病気さえ装うことで彼らの抵抗を示したのである。

アフリカの記憶や伝統を保持し続けること自体も抵抗の様式であった。彼らの労働歌、スピリチュアル・ソング、民話、諺の中で、奴隷達は祖国アフリカから持ってきた口承文化の本質を保持する事が可能なのであった。しかしながら、このような創造的表現において、アフリカ人達は異なったアフリカ言語、信仰制度、記憶と慣習の混合により、それは西インドあるいはアメリカでの奴隷としての新しい境遇のもとで出現したものであるが、彼らは新しい文化形式をも創造したのである。歌、物語、信仰と踊りを含む新しい民族文化は、奴隷制により身体を打ちのめされたアフリカ人の精神と心を育てたのである。このことは奴隷達が彼らの苦悩、苦痛はもちろん望みや愛情を

表現する声と手段を発見したのだということもわれわれに教えてくれるのである。事実、これらの文化表現の行為は非人間的な黒人奴隷搾取制度、それは黒人奴隷の人格といかなる意味においても共同体の否定を目指すものであったが、それに対峙してアイデンティティと伝統を保持し、創造するうえで信じられないほど重要であった。

奴隷達が人間以下の取扱をうけているという事実のもとで、アフリカ人奴隷や以前に奴隷であった者達の作品は重要な記録であり、それらは大いに創造性と精神豊かさに富む史料であり、途方もない断片的な情報に対して耳にできる成功した抵抗の証言なのである。しかしながら、教育、勇気と書く意志が見られるとしても、それは必ずしもそのアフリカ人が作家として、受け入れられるわけではない。アメリカ人奴隷、フィリス・ウイトレイ Phillis Wheatley は1773年に詩の本を出版したが、それは彼女を支援しかつ作品を彼女自身のものであることを確認している、ボストンで最も尊敬されている市民グループによって書かれた「証明書」を手に入れてやっと出版ができたのである。この詩が評判を得た後でさえも、多くの人々はアフリカ人が詩を書く事ができるなんて信じる事ができなかった。事実上、奴隷や解放奴隷の文字表現上での努力は廃止運動の重要な道具であった。奴隷や解放奴隷が読み書きができ、文学作品を創造することができること自体、奴隷制支持の議論、すなわち、アフリカ人はヨーロッパ人より生来知的に劣っていて、それゆに奴隷になるのが当然であるという議論を、著しく後退させたのである。

その内容は、多分、奴隷の説話でありその内容は作者の奴隷状態から解放への道程であり、その処遇の残酷さや不正義さの詳細であり、廃止論者の運動と密接なつながりを有するものであった。すでに100以上の奴隷の説話が知られているが、これらのうちで有名なものは『オラウダー・エキアノの興味深い一生』(1789年)と『アメリカ人奴隷、フレデリック・ダグラスの生涯』(1845年)である。奴隷の説話の大部分は男性によるものであるが、女性による二つの説話は特に重要であると見做される。ハリエット・ヤコブスの『ある奴隷少女の生涯と出来事』(1861年)は重要である。なぜならそれは女性の奴隷の性的な傷つきやすさを強調しているからである。ヤコブスは白人の読者の感情を害する部分は含めないように注意したけれども、女性の奴隷が主

人の手中で耐えねばならない肉体的なまた性的な二つの退廃の持つ意味を強烈に提起した。

『西インドの奴隷、メアリ・プリンスの自叙伝』は反奴隷制協会の後援で、1831年にロンドンとエディンバラで発行された。同組織の機関誌『反奴隷制レポーター』は、廃止論者のキャンペーンのためにより一層の大衆の支持を得るように、しばしば奴隷の苦悩を記録した。これらの黒人の抑圧の描写は、一つの重要な政治的機能に貢献していたが、黒人自身が描写し、自身の物語を語る事は決定的に重要であった。このことは、メアリ・プリンスが彼女の説話において、五人の主人の処遇の違い、彼らの残虐さと誘惑に対する抵抗する自覚的な行為を正確に述べる事ができたということである。彼女はバミューダ島に生まれたが、タークス島、後にアンティガ島へ売られた。メアリ・プリンスは最後は、1872年ロンドンで執念深い主人ウッズからついに自由をうまく手に入れることができたのである。自分自身が奴隷から脱出できた後、メアリ・プリンスは、他の奴隷達の自由のために働きたいと切望した。彼女は書いている。「私自身の悲しみを語る時、私の同胞の奴隷達の悲しみを素通りできません。なぜなら、私の悲嘆を考える時、彼らを思い出すからです。」プリンスは反奴隷制運動に関わりを持つようになり、彼らの支援と手引きにより彼女の感動的な生涯の物語を書いたのである。そして最後に一段と高い調子でイギリス人に訴えている。「私は彼らが神への祈りを決して捨てないように、そしてイギリスの偉大な王に、あわれな黒人に自由が与えられ、奴隷制が永久になくなるまで大声で呼びかけることを望んでいます。」と。

(つづく)